宅地造成に伴う
花草山古墳群第２次発掘調査報告書
—29・30・31号墳—

2003年

財団法人　東大阪市文化財協会

例言

1．本書は財団法人東大阪市文化財協会が1997年1月27日～6月16日に、花草山古墳群で実施した発掘調査の報告書である。
2．現地調査および本書の執筆は井上伸一が担当した。
3．現地における測量の基準には原則的に、国土座標第VI系を用い、北は座標北を指す。水準高はT.P.（おおむね東京湾中等潮位）を用いた。
4．現地で調査した土壌の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修）に準じた。
5．出土金属製品の一部は財団法人元興寺文化財研究所に保存処理を委託した。また同研究所の石川恵美氏にご教示を得、保存処理に伴う分析結果も本文中で利用させていただいた。
6．調査の実施に当たり、株式会社日昭住建にご協力賜った。
7．現地調査および整理作業には下記の補助員の参加があった。
有岡太郎、有坂光司、大須賀美樹、大館大祐、梶浦泰久、岸田勝行、古藤貴洋、小堀和彦、西村和彦、日高貴史、本田けい子、松本健太郎、宮本勇、森澤匡晴、山内政治、山岡茂樹

目次

第1章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第2章　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第3章　調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　29号墳の調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　30号墳の調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　　31号墳の調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第4章　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

第1章　はじめに

花草山古墳群は東大阪市上四条町に位置する古墳時代後期の群集墳である。当古墳群は北を花草谷、南を鳴川谷によってはさまれた標高40～170mの生駒山地西側の尾根～扇状地に立地している。

これまでに花草山古墳群では、31基の古墳が確認されている。戦時中に防空壕として使用された5号墳、石室内に宝暦13年（1763）銘の石塔が安置された経塚古墳の別名をもつ15号墳などのように、保存されているものも数基あるが、既に7基は埋没、10基は消滅している。

東大阪市域では最大規模の68基が確認されている山畑古墳群の南に隣接し、確認された古墳数もそれに次いでいる花草山古墳群であるが、発掘調査が行われたのは23・24号墳の2基にすぎない（吉村1988）。その他の古墳は、試掘調査でその存在を確認した後に再び埋め戻されたり、開口している古墳の石室だけが測量調査されるなどにとどまっているため、本古墳群の解明のため、古墳の分布調査や採集遺物の検討などが進められてきた（荻田1977、秋山・池谷2000）。

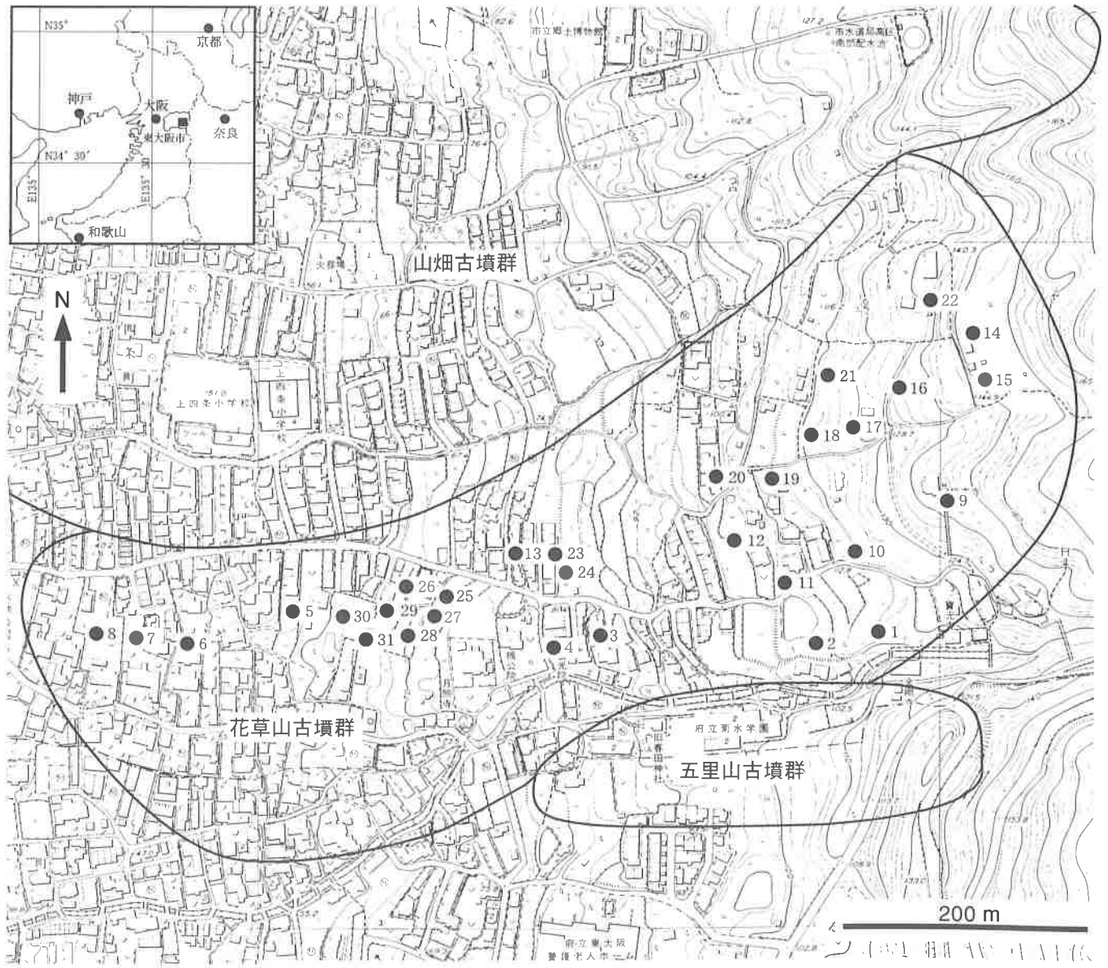


図1　花草山古墳群の位置図

第2章　調査に至る経過

1988年11月18日に東大阪市教育委員会が日昭興産株式会社の依頼を受けて、花草山古墳群内の東大阪市上四条町1227番地外計25筆内で11カ所の試掘調査を行った。また同年11月29日に上四条町1229-1番地において1カ所追加で試掘調査が行われた。その結果、6世紀代から継続する26号墳～30号墳の横穴式石室5基が確認され、そのうちのひとつ28号墳の奥壁付近からは須恵器杯・蓋・高杯・台付壺・坩、土師器皿、鉄刀などの副葬品が出土した。そのため開発計画を進めるに当っては、古墳の保存を前提に教育委員会と協議をし、工事計画が固まった段階で、工事の届出書を提出するようにとの判断が依頼者側に示された。

その後、1750m²の宅地造成計画が固まった1996年10月3・4日に3度目の試掘調査が、上四条町1228-8他17筆において4カ所、財団法人東大阪市文化財協会によって行われた。このうち1カ所で31号墳の横穴式石室が検出され、またもう

図2　調査地区割り図

1カ所で露頭する巨大な石の集積が石室である可能性が高いとされた。そのため宅地造成工事を行うには、事前の発掘調査が必要であるとの判断が依頼者に示され、協議が重ねられた。

その結果、宅地造成範囲内で古墳が確認された地点を中心に3カ所の調査区が設定され、東大阪市文化財協会が宅地造成に伴う花草山古墳群第2次発掘調査を受託することとなった。調査地の東部では、1988年に確認された29号墳が直径13m程度の円墳と想定されたため、横穴式石室を中心に217m²を発掘調査することとなった。調査地の中央部では、1996年に確認された31号墳も直径13m程の円墳と想定されたため、横穴式石室を中心に265m²を発掘調査することとなった。調査地の西部では、1988年に確認された小石室を主体部とする直径10m程の円墳と想定される30号墳と、1996年に古墳の可能性があるため確認が必要とされた巨石群を含む284 m²を発掘調査することとなった。調査計画上の合計面積は769m²であるが、残土置場や安全上の関係から実質的な調査面積は少し狭くなっている。また各調査区の上層である近年の盛土0.5～4 mは機械掘削を行い、それ以下を人力掘削した。

現地調査は1997年1月28日～6月16日、整理作業は1997年6月17日～2002年12月26日まで行った。

図3　生駒山地と花草山古墳群遠景　西から

図4　花草山古墳群から大阪平野の遠景　東から

第3章　調査の結果

1．29号墳の調査結果

遺構

現地の標高は68.7m前後で平坦面をなしていた。層厚20～30cmの表土層および耕土層を機械掘削すると、第3層の下面で図6に示した1×5間の掘建柱建物が検出された。梁の間隔は206～237cm、桁の間隔は130～142cmで、ピットは長径40～75cm、短径40～60cmの楕円形をなす。検出面からこの建物は近世以降のものと言える。

第4～39層は中世の棚田を覆う近世の整地層で、層厚は調査地中央部で約40cm、南西部で240cmあり、花崗岩の風化礫を多量含んでいた。

近世の整地層下面では第40層の中世耕作土層および29号墳の石室が検出された。東側側壁は概ね2～3段、西側側壁には概ね1～2段の石が遺存しており、東側側壁より西側のT.P.+68m前後の水準で中世の耕作土層が認められた。従って29号墳が破壊されたのは棚田造成のためであり、西側側壁よりも東側側壁が一段高く石が遺存していたのは、東側側壁を石垣に転用するためであったことが明らかとなった。

第41層は棚田造成後の堆積層、第42～45層は棚田造成時の整地層、第46層は棚田造成前の堆積層である。中世耕作土層より下位の石室内には、概ね図27に示

図5　A地区機械掘削　西から

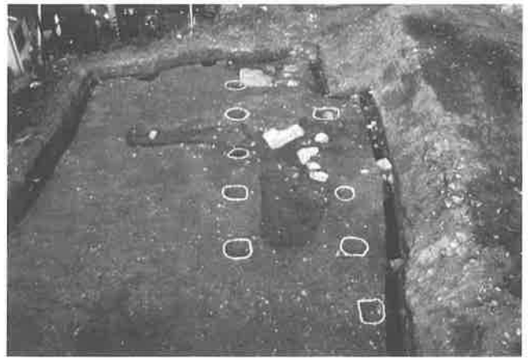
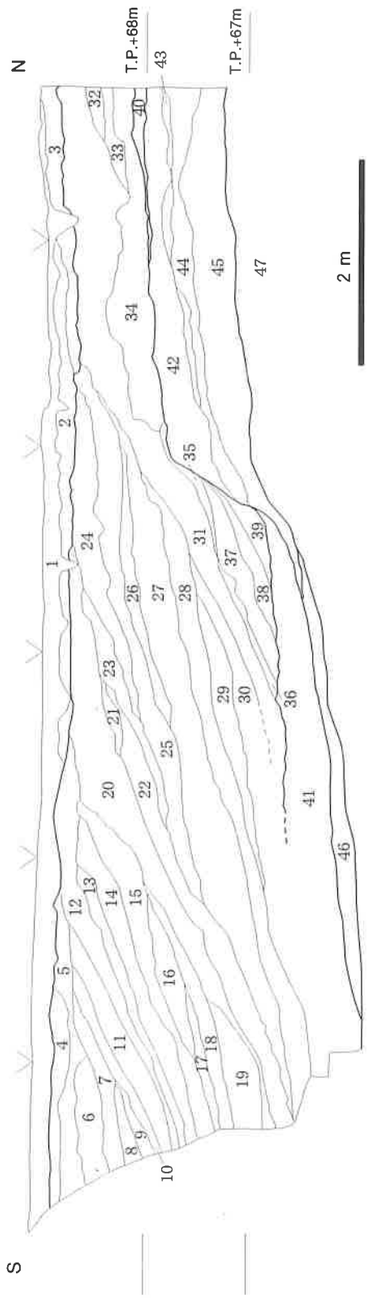


図6　A地区掘立柱建物　南から

図7　A地区西壁断面

図8　29号墳石室内埋土出土遺物



1 表土
2 盛土
3 表土
4 10YR3/4 暗褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫微量
5 10YR2/2 黒褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
6 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層、10cm 以下の礫少量
7 10YR2/1 黒色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
8 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層、3cm 以下の礫少量
9 10YR3/3 暗褐色　花崗岩の風化礫層、3cm 以下の礫少量
11 10YR3/2 黒褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
10 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層、3cm 以下の礫少量
12 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層、5cm 以下の礫少量
13 10YR3/3 暗褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、10cm 以下の礫少量
14 10YR3/3 暗褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
15 10YR3/3 暗褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
16 10YR3/4 暗褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
17 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層、3cm 以下の礫多量
18 10YR3/3 暗褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫少量
19 10YR2/3 黒褐色　礫層、シルト～極粗粒砂まじる
20 10YR3/4 暗褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫微量
21 10YR4/4 褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト
22 10YR2/2 黒褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、10cm 以下の礫少量
23 10YR3/4 暗褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
24 10YR3/4 暗褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、10cm 以下の礫少量
25 10YR5/4 にぶい黄褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、10cm 以下の礫少量
26 10YR4/4 褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、10cm 以下の礫少量
27 10YR3/4 暗褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、10cm 以下の礫微量
28 10YR4/4 褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫微量
29 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層
30 10YR3/2 黒褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
31 10YR4/3 にぶい黄褐色　5cm 以下の礫少量
32 10YR3/2 黒褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫微量
33 10YR4/6 褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト
34 10YR3/2 黒褐色　粗粒砂～シルトまじり礫層、30cm 以下の礫多量
35 10YR4/6 褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト
36 10YR4/6 褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫微量
37 10YR5/6 黄褐色　花崗岩の風化礫層
38 10YR5/6 黄褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫多量
39 7.5YR3/2 黒褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト
40 2.5Y4/1 黄灰色　中世耕作土
41 7.5YR2/2 黒褐色　50cm 以下の礫層シルト～極粗粒砂まじる
42 2.5YR3/2 暗赤褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、5cm 以下の礫少量
43 10YR3/3 暗褐色　極粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、3cm 以下の礫多量
44 2.5YR4/4 にぶい赤褐色　中粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、2cm 以下の礫微量
45 10YR3/3 暗褐色　粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト、20cm 以下の礫少量
46 10YR3/3 暗褐色　極粗粒砂～5mm 以下の礫まじりシルト
47 地山

図 9　A 地区西壁断面図

したような埋土によって充填されされており、石室に使用されていた転落石が数個認められた。また敷石上面には、天井石の隙間から石室内に堆積したと思われる中礫混じり細粒砂～極細粒砂が部分的に認められた。

29 号墳が破壊されて本調査区が耕作地と化したのは、図 8 に示した瓦器椀、土師器羽釜などの石室内埋土出土遺物から13世紀末～14世紀前半頃と推測される。

29 号墳は南へ下がる尾根上の地形の南端で検出された。墳丘は棚田造成時に削平されているが、こうした地形を墳丘裾部に利用して造営されていたとすれば、円墳であったと推測される。

埋葬施設は、南向きに開口する左片袖の横穴式石室である。石室の規模は玄室の長さ 2.8m、羨道の長さ 4.9m で全長 7.7m、奥壁前の玄室幅 1.4m、現存高 1.25m である。墓壙は西側側壁の外 22cm、東側側壁の外 60cm のところで検出された。

石室は前述したように、西側側壁で1～2段、奥壁で 2 段、東側側壁で 2 ～ 3 段の石が遺存していた。奥壁と東側側壁には持ち送りが認められる。石材は幅 125cm 以下の斑糲岩が主体で、花崗岩は西側側壁の羨門から 4 石目でひとつ用いられているにすぎない。

図 10　29 号墳全景

図 11　29 号墳調査風景　西から

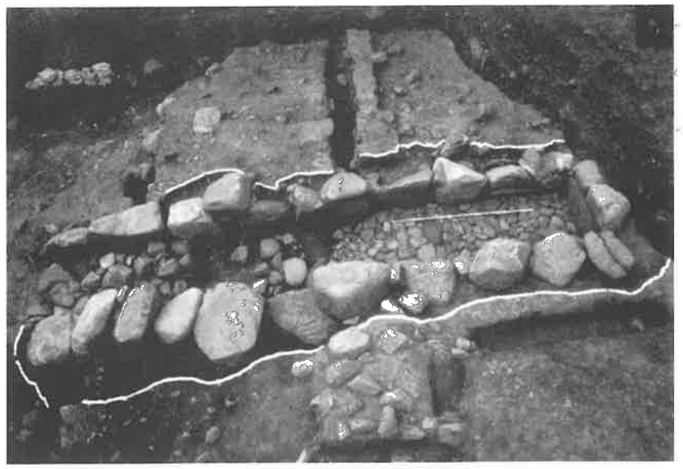


図 12　29 号墳全景　東から

床面には玄室と羨道の北部に敷石が認められ、敷石の大きさと並びから、2回にかけて敷き詰められたものと考えられる。まず奥壁から南へ190cmまでの玄室に長辺25cm 以下の石が、奥壁側から順に敷き詰められたようである。次に玄室南部～羨道北部であるが、1回目の敷石の南端に長辺40cm以下の石、東側側壁に沿って長辺28cm 以下の石を並べて、北東から南西方向に石を敷き詰めていったようで、西側には隙間を埋めるため、拳大の小さな石を多用して調整している。南西隅では敷石の一部が消失しており、盗掘による移動あるいは閉塞石として転用されたものと思われる。

羨門から北へ2.4mまでの羨道には、閉塞石が遺存しており、長辺70cm以下の石が、50cm 程の高さに積み上げられていた。

29号墳では、敷石の工程、耳環が6点出土していること、遺物の分布状況など

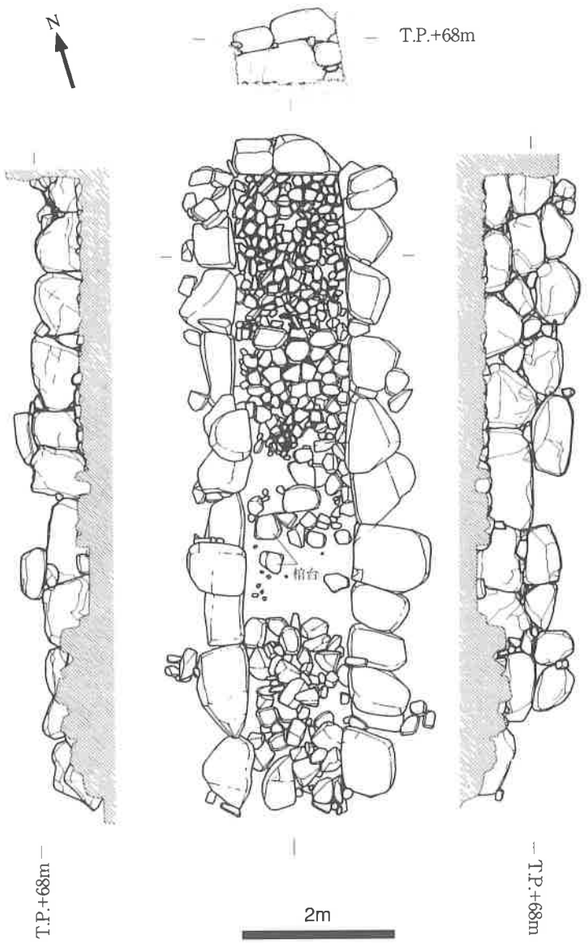


図13　29号墳平面図・立面図

図14　A地区遺構平面図

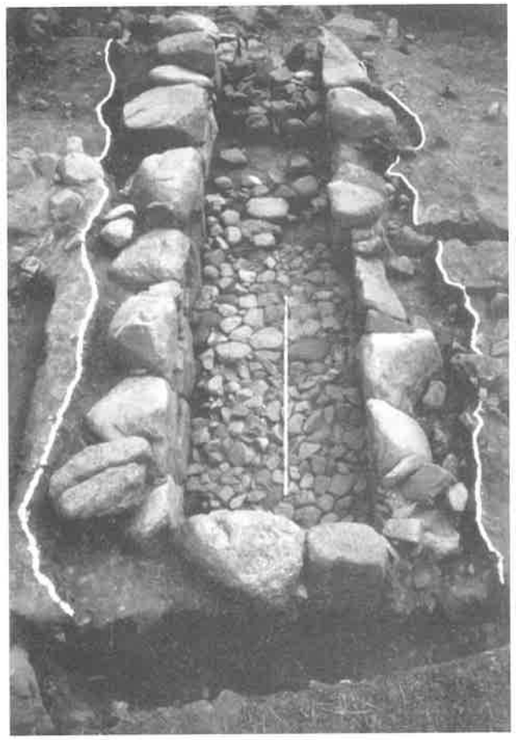


図15　29号墳全景　北から

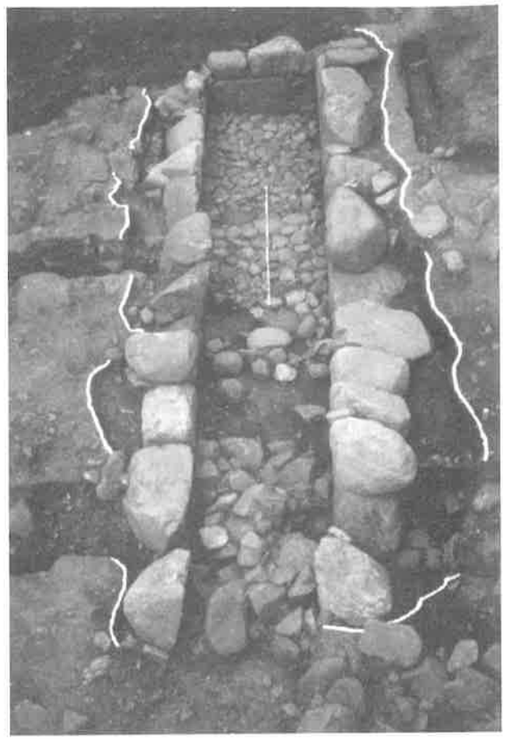


図16　29号墳全景　南から

図17　29号墳奥壁

図18　29号墳奥壁北東コーナー

図19　29号墳東側側壁

図20　29号墳西側側壁袖

図21　29号墳玄室　北から

図22　29号墳石室内　北から

図23　29号墳羨門

図24　29号墳閉塞石

から、3回ないし4回の埋葬が行われたものと考えられる。

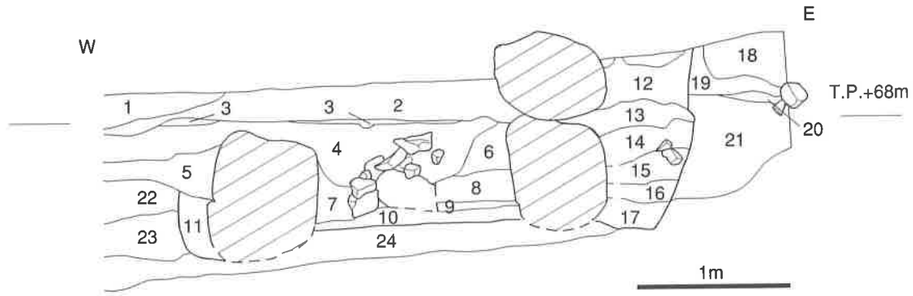
玄室での埋葬は、図28に示した18と20の鉄釘の出土位置が、安置された組合式木棺の南辺の原位置を示すものと思われる。また、鉄釘32が高杯3の下から出土しており、これが木棺の北辺を示すものと思われる。これら3点の鉄釘の出土状況から、1回目の埋葬は玄室奥のやや東寄りで石室の主軸と平行に、長さ約180m、幅約60cmの組合式木棺が安置され、1～3の土器は棺外に副えられたものと推測される。これらの土器は6世紀後半のもので、29号墳の築造と被葬者の埋葬時期を示している。また上記3点の鉄釘を結ぶ線上から出土した鉄釘18・33・24は、側板と底板を固定したもので、ほぼ原位置を保っているものと思われ、17・28・35・23・21の鉄釘は天井板と側板を固定していたもので、その出土状況から、側板が外側の東方に倒れて、鉄釘が散乱したという組合式木棺の劣化の過程が復元できる。なおこの埋葬位置周辺からは人骨が検出されなかった。

玄室南部～羨道検出の遺物は移動して原位置を保っていないものが多く、安置された木棺の位置を推測するのは困難である。しかし遺物の分布状況は、2度目の敷石上の袖付近で検出された遺存状態の極めて悪い人骨の細片と金属器群、羨門から北へ3・4石めの両側壁に沿って検出された土器群、閉塞石の下で検出された金属器群と、大きく3つに分けられる。この遺物の分布状況が埋葬位置を反映しているとすれば、29号墳での埋葬は4回となる。また閉塞石の下で検出された遺物が移動させられたものとすれば、埋葬は3回と推測することも可能であろう。

羨道南半には東側側壁に沿って4～7・14・16の土器、西側側壁に沿って8～10・12・13・15の土器が副えられており、その間に木棺が安置されたものと思われ、7

図25　29号墳西側側壁墓壙断面

図26　29号墳東側側壁墓壙断面



1．7.5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり中粒砂～中礫
2．10YR3/3暗褐色シルト混じり中粒砂～細礫
3．2.5Y4/1黄灰色中世耕作土
4．10YR3/4暗褐色細粒砂～細礫混じりシルト
5．10YR3/2黒褐色中粒砂～細礫混じり粘土
6．10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂～細礫
7．10YR3/3暗褐色細粒砂～極粗粒砂混じりシルト
8．10YR4/2灰黄褐色細粒砂～細礫混じりシルト
9．10YR3/3暗褐色中粒砂～細礫
10. 5YR2/2黒褐色中礫混じり細粒砂～極粗粒砂
11. 10YR3/2黒褐色粗粒砂～中礫
12. 5YR2/2黒褐色中粒砂～細礫混じり粘土
13. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂～細礫混じりシルト
14. 7.5YR3/2黒褐色細粒砂～中礫混じり粘土
15. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～中礫混じりシルト
16. 2.5YR3/2暗赤褐色中粒砂～粗粒砂混じりシルト
17. 7.5YR2/2暗褐色中粒砂～中礫混じりシルト
18. 7.5YR3/2黒褐色中粒砂～細礫混じりシルト
19. 5YR3/1黒褐色粗粒砂～中礫混じりシルト
20. 10YR3/3暗褐色中粒砂～細礫混じりシルト
21. 10YR3/2黒褐色粗粒砂～中礫混じりシルト
22. 5YR3/2黒褐色中粒砂～細礫混じり粘土
23. 10YR3/3暗褐色シルト混じり中粒砂～細礫
24. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～細礫混じりシルト

図27　29号墳墓壙断面図

の長頸壷の西側約50cmで検出された人骨は、29号墳に埋葬された最後の被葬者と考えられる。またこの人骨は床面から浮いた状態で検出されたため、棺台が使用されたと思われるが、棺台らしき石は石室西側で2石が確認されたにすぎなかった。29号墳における追葬の最終時期は、後述する副葬品の土器から6世紀末と推測される。

出土遺物

1の須恵器蓋は天井部約1/3がヘラ削りされ、口縁端部は丸い。2の須恵器樽形壷には2条の波状文が描かれる。3の須恵器高杯は長脚2段透かしで、2方に透かしが認められる。これら玄室出土土器は6世紀後半頃のものと思われる。

4・5は須恵器蓋、6～10は須恵器高杯である。8・10は2方に、9は3方に透かしがあり、6・7には透かしがない。これら高杯の脚部には、低脚化の傾向が窺える。11の須恵器小型壷は、出土位置が明らかでなく、副葬品であったかど

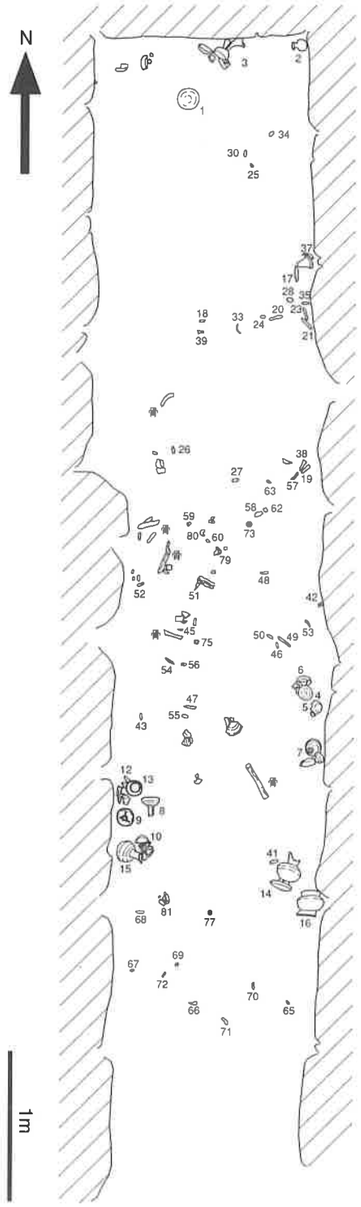


図28　29号墳石室内遺物出土状況

図29　29号墳玄室遺物出土状況

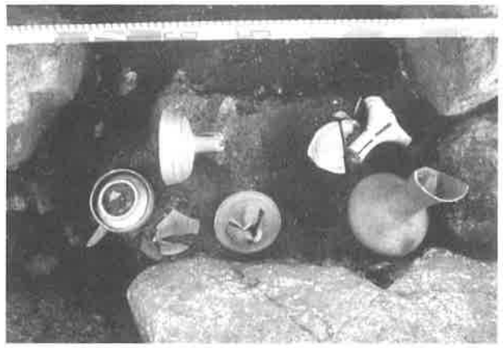


図30　29号墳羨道遺物出土状況

図31　29号墳羨道遺物出土状況

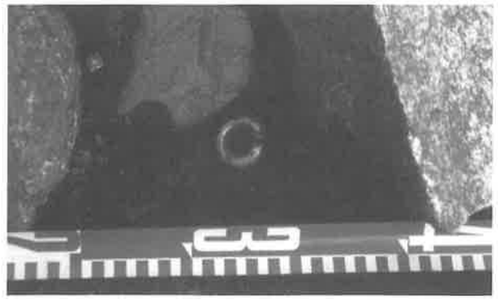


図32　29号墳羨道遺物出土状況

うか定かでない。12は須恵器無頸壷、13は土師器把手付杯で、12は13の中に納められた状態で出土した。14～16は須恵器壷で、14・15は長頸、16は広口であり、14の脚部には2方に透かしが認められる。これら羨道出土土器は、8～10・12・13が西側側壁、4～7・14～16が東側側壁に沿って出土した。出土位置が定かでない11をさしおいて、これらの遺物は6世紀末頃のものと思われる。

玄室出土の金属器は、木棺に使用されていた釘、鋲が多数を占める。釘には20～24などのように一辺7 mmを越える断面正方形をなす大きめのもの、26・29・31・32などのように一辺5 mm前後の断面正方形をなす小さめのものが認められる。25の鋲は幅5 mm、厚さ2 mmの断面長方形をなす。

羨道出土の金属器には鉄鏃、釘、鋲、耳環、刀装具がある。41の鉄鏃は有茎で腸抉を持ち、厚さは5 mmで扁平である。40・42は上半が欠けているが、下半は41と類似しており、同様の形状をなしていたものと思われる。43～53は木棺に使用されていた釘、55・56は鋲である。また閉塞石の下からも65～72の釘、鋲などが出土している。耳環は6点出土し、73・74は銅芯に金メッキ、75～78は銅芯に銀メッキが施される。79～81は刀装具と思われる。79は幅5 mm、厚さ3 mmの環状の銅が鉄身に取り付く。80は79とほぼ同形状の環状の銅と、銅の薄片に金メッキが施されたものである。79と80は約12cmの距離で出土していること、80の下から刀身と思われる64、79と80の間からも刀身と思われる60が出土していることから、これら4点は本来、同一個体であった可能性がある。図50に示した81は、写真左列が木で、2列目が鉄で刀身、それ以外は銅に金メッキが施されている。3列目は中央に直径10mmの孔があり、木の葉が象られている。4列目下は把頭の端部で左列上に取り付くものと思われる。写真右上は筒状をなし、3列目の孔に取り付く懸通孔と思われる。

また石室内からは玉が2点出土した。82は滑石製臼玉、83は濃い青色をしたガラス製である。これらの玉は出土点数が極めて少ないため、副葬品ではなく、混入したものと思われる。

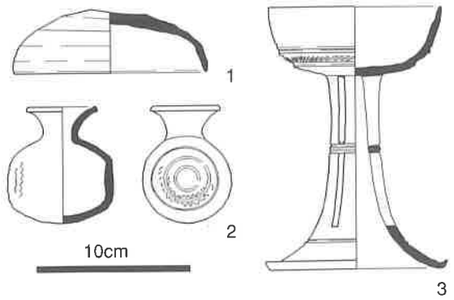


図33　29号墳玄室出土土器実測図

図34　29号墳玄室出土須恵器蓋・樽形壷・高杯

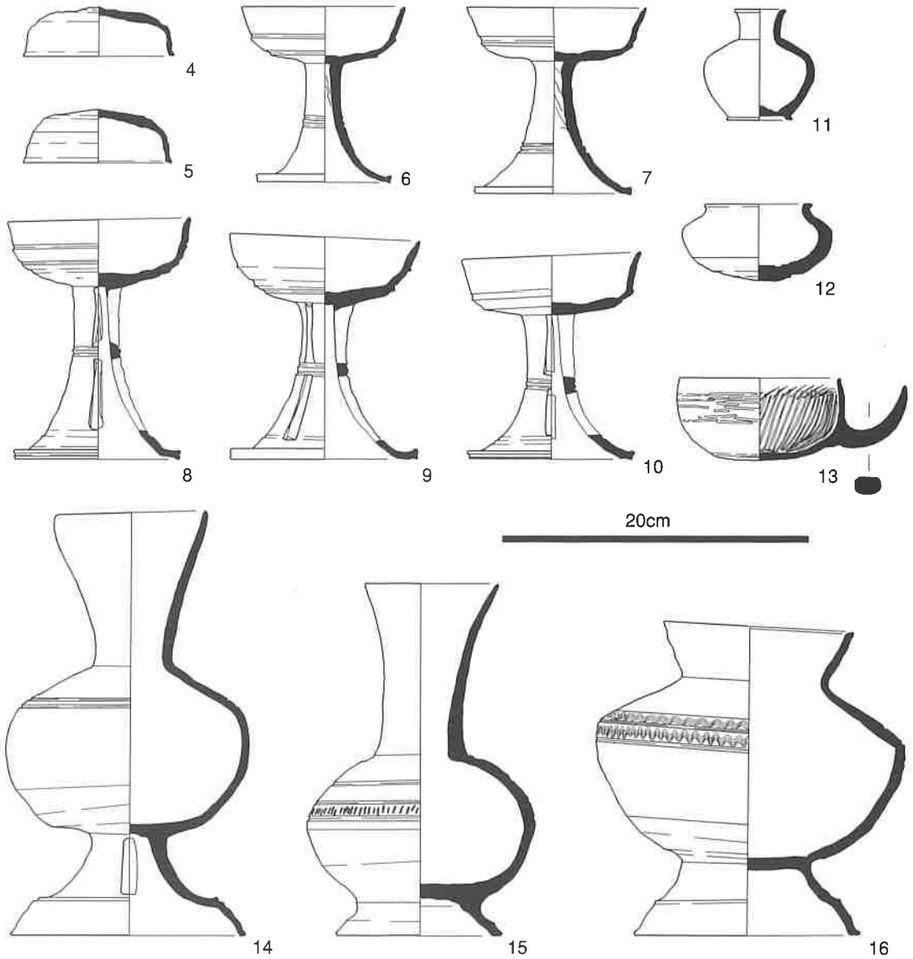


図35　29号墳羨道出土土器実測図

図36　29号墳羨道出土須恵器蓋

図37　29号墳羨道出土須恵器高杯

図38　29号墳羨道出土須恵器壷

図39　29号墳羨道出土須恵器無頸壷、土師器把手付杯

図40　29号墳羨道出土須恵器長頸壷・広口壷

図41　29号墳玄室出土釘

図42　29号墳玄室出土釘・鎹

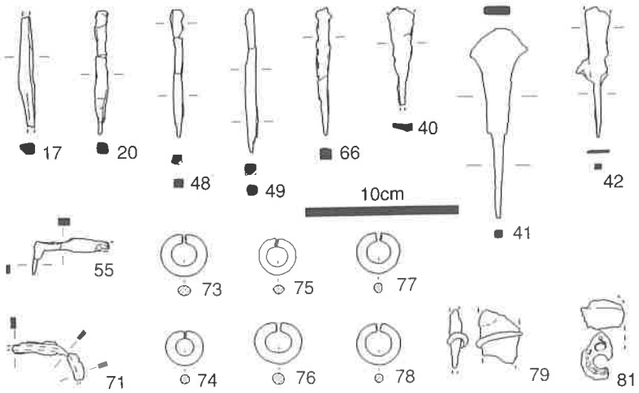


図43　29号墳出土金属器実測図

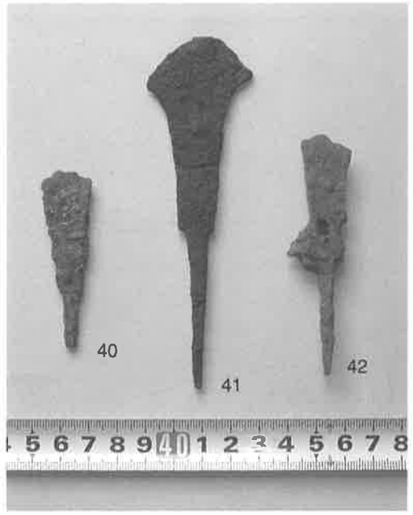


図44　29号墳羨道出土鉄鏃

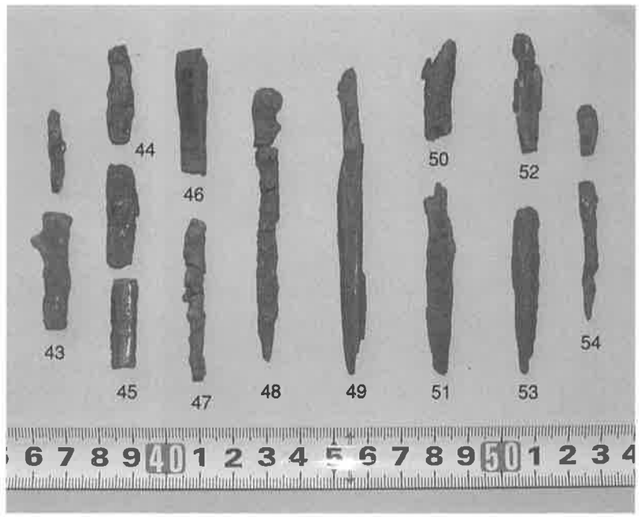


図45　29号墳羨道出土釘

図46　29号墳羨道出土鎹・不明鉄器

図47　29号墳玄室出土不明鉄器

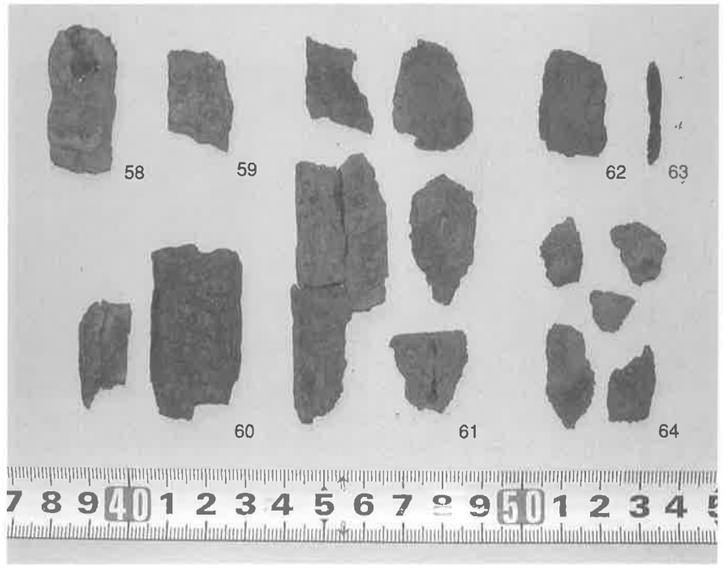


図48　29号墳羨道出土大刀？・不明鉄器

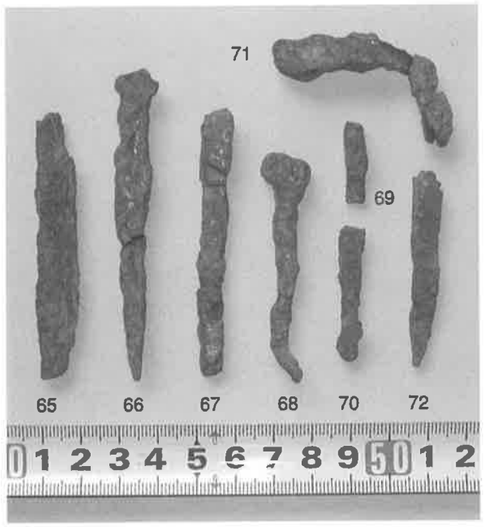


図49　29号墳羨道出土釘・鎹・不明鉄器

図50　29号墳羨道出土耳環

図51　29号墳羨道出土刀装具

図52　29号墳羨道出土刀装具

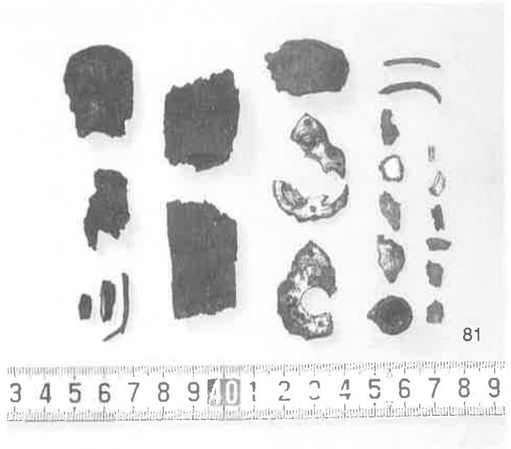


図53　29号墳羨道出土刀装具

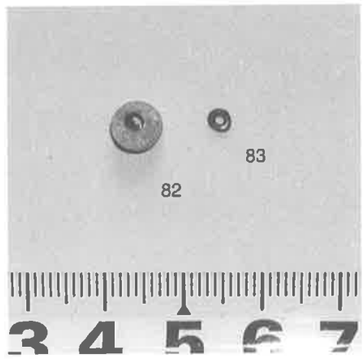


図54　29号墳出土玉

2．30号墳の調査結果

遺構

現地の標高は63.2m前後で平坦面をなしていた。層厚30cmの盛土を機械掘削すると、近世～近代の耕作土層と、一辺1.5m以下、深さ30cm以下の隅丸方形をなす土壙群が検出された。土壙は概ね、暗褐色の中粒砂～中礫混じりシルトを埋土としていた。土壙の配置に規則性は認められず、その性格は明らかでない。

第4層は近世～近代の耕土、第5～7層は棚田造成時の整地層、第8～13層は墓壙内埋土、第14層は地山である。

図55　C地区機械掘削　北から

石室内の埋土は下から、埋葬面より25cm以下の厚さで中世の遺物を含む中粒砂～細礫混じりシルトが石室内の全面に認められ、その上位には層厚12cmの粗粒砂～細礫が玄室の一部で検出された。それより上位の埋土は、奥壁側から充填されたため南に傾斜しており、奥壁から3.2mまでには層厚77cmの炭化物を含んだ灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混じりシルト、その上位には暗褐色シルト混じり粗粒砂～中礫が堆積していた。奥壁から1.3m～4.6mの間には、層厚50cmのにぶい黄褐色シルト混じり粗粒砂～中礫と

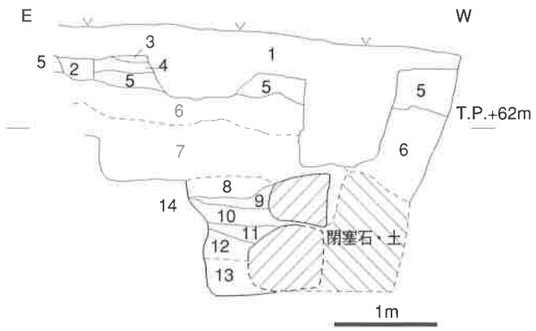


図57　C'地区南壁断面

1．盛土
2．10YR3/3 暗褐色シルトまじり中粒砂～5mm以下の礫、3cm以下の礫少量
3．10YR3/3 暗褐色細粒砂～5mm以下の礫まじりシルト
4．10YR3/2 黒褐色中粒砂～5mm以下の礫、Fe沈着
5．10YR3/4 暗褐色細粒砂～5mm以下の礫、5cm以下の礫少量
6．10YR3/3 暗褐色中粒砂～5mm以下の礫まじりシルト、20cm以下の礫多量
7．10YR3/2 黒褐色5～25cmの礫多量、中粒砂～5mm以下の礫まじり粘質シルト
8．10YR3/4 暗褐色中粒砂～5mm以下の礫まじり粘質シルト、3cm以下の礫微量
9．10YR3/4 暗褐色粗粒砂～5mm以下の礫まじりシルト、5cm以下の礫微量
10. 10YR3/4 暗褐色粗粒砂～5mm以下の礫まじりシルト、5cm以下の礫少量
11. 10YR3/2 黒褐色中粒砂～5mm以下の礫まじりシルト、5cm以下の礫微量
12. 10YR3/3 暗褐色中粒砂～5mm以下の礫まじり粘質シルト、2cm以下の礫微量
13. 10YR3/2 黒褐色粗砂～5mm以下の礫まじり粘質シルト、30cm以下の裏込巨礫多量
14. 7.5YR3/3 暗褐色花崗岩風化礫まじりシルト～粘土

図56　C地区南壁断面図

図58　30号墳埋土出土遺物

図59　30号墳検出状況

図60　C地区遺構全景

層厚35cmの炭化物を含んだ暗褐色シルト混じり中粒砂～細礫が認められた。また奥壁から2.4mのところから羨道南端までは、暗灰黄色シルト～粗粒砂混じり中礫によって埋められており、本層からは近世の遺物も数点出土したが、これより下位の埋土からは中世以前の遺物しか出土しておらず、二次的な混入と考えられる。30号墳が破壊されたのは、図58に示した瓦質擂鉢、陶器甕などの埋土層出土遺物から15世紀頃と考えられる。

30号墳の埋葬施設は、南向きに開口する左片袖の横穴式石室である。検出された石室の規模は玄室の長さ4.6m、羨道の長さは7m以上である。石室の南端には閉塞石が認められること、本調査区のすぐ南西は切土された住宅地となっていることから、検出された側壁の南端の石は羨門にあたると考えられ、こしたことから石室の全長は最大でも13m以下と推測される。玄室の幅は2m、羨道の幅は1.7～1.9m、現存高は2mである。

なお試掘調査で小石室とされていたのは誤認であり、また調査区南東隅に集積していた古墳の可能性があるとされていた石群は、整地などの際に寄せ集められた石群であることが明らかとなった。

墓壙は図56に示したように東側側壁の外約80cmのところで確認された。また西側側壁の墓壙は、側壁の外約100cmのところで認められた。

石室に使用されていた石は長辺140cm以下の斑糲岩が主体で、袖に使用されていた石は最も大きく、幅と高さは120cmを測る。奥壁には2～3段、両側壁には1～3段の石が持ち送りを保ったまま遺存しており、石の積み方から考えて、奥壁側から5個めの側壁の石から順に構築したものと思われる。

床面には奥壁から南へ8m付近までの範囲に敷石が認められ、石の大きさと並びから、3回にかけて敷き詰められたものと考えられる。1度目の敷石は、まず初めに奥壁から

図61　C地区遺構平面図

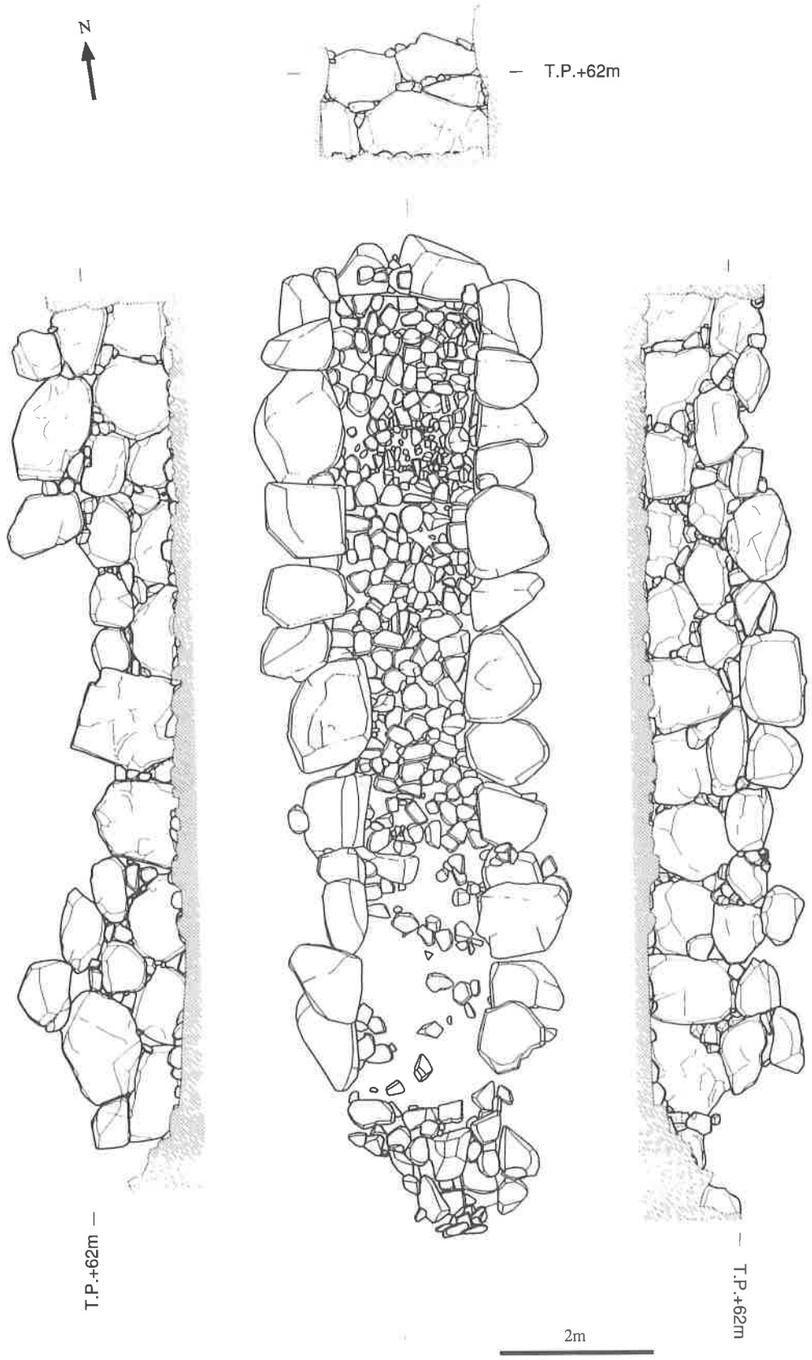


図62　30号墳平面図・立面図

図63　30号墳全景　北から

図64　30号墳全景　南から

図65　30号墳全景　南から

図66　30号墳石室内全景
南から

図67　30号墳玄室床面盛土　西から

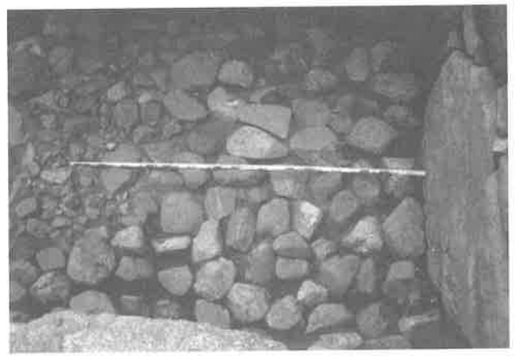


図68　30号墳玄室敷石

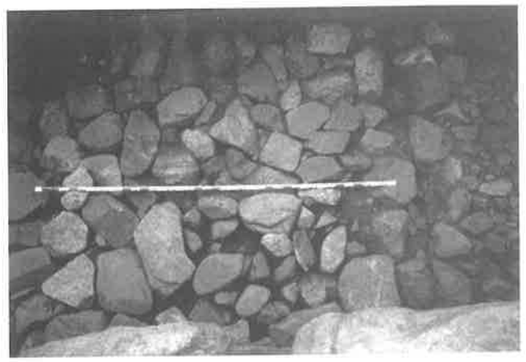


図69　30号墳玄室敷石

図70　30号墳玄室敷石

図71　30号墳奥壁　北東コーナー

図72　30号墳奥壁　北西コーナー

図73　30号墳袖

図74　30号墳西側側壁

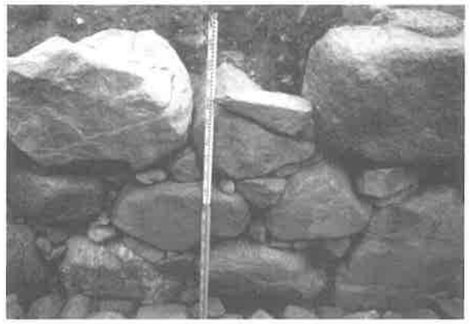


図75　30号墳東側側壁

図76　30号墳閉塞石

図77　30号墳閉塞石

図78　30号墳石棺出土状況

図79　30号墳玄室遺物出土状況

図80　30号墳玄室遺物出土状況

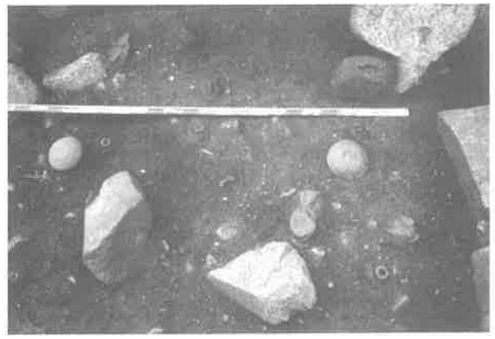


図81　30号墳羨道遺物出土状況

図82　30号墳閉塞部遺物出土状況

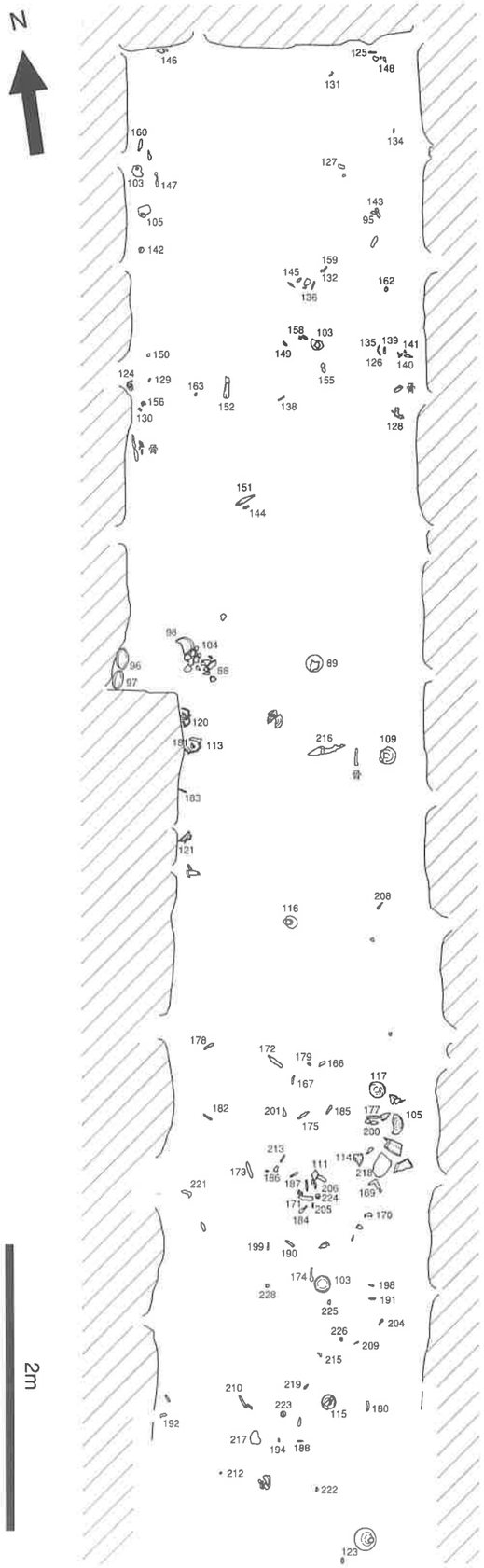


図83　30号墳遺物出土状況

2.6mのところに長辺40cm以下の石を東西に、次に東側側壁に沿って長辺36cm以下の石を並べた後に、奥壁側から順次それらの石とほぼ同じ大きさのものを敷き詰めたようで、同じ大きさの石が不足したためか奥壁から1.5～2.3mの範囲には拳大の石が多様されており隙間が目立つ。2度目の敷石は、1度目の敷石と東側側壁前では奥壁から5.42m、西側側壁前では奥壁から5.78mまでの範囲と考えられる。南縁には長辺54cm以下の石が並べられている。また両側壁に沿った敷石も早い段階に並べられたようで整然と並んでいた。北半の中央部は円弧を描くように石が敷き詰められている。3度目の敷石の南半は、盗掘あるいは閉塞石に転用されたためか石が消滅して隙間が目立つ。

羨道の南端には92cmの高さに積まれた閉塞石が認められた。石の多くは面を奥壁に向けられている。

30号墳では敷石の工程、遺物の分布状況、耳環の出土数などから少なくとも6回の埋葬が行われたものと考えられる。

1回目の埋葬は、奥壁から南へ2.6mまでの1度目に敷かれた敷石の上に、10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～5mm以下の礫混じりシルトを約20cm盛って行われていた。上面で土器や金属器が検出されたほか、凝灰岩製の組合式石棺の破片が出土した。石棺が安置されていた場所は遺物の分布状況から、玄室の西半であったと考えられる。奥壁・西側側壁に沿って副葬された鉄鏃・鉸具などが出土した。2回目の埋葬はその東側で行われたものと推測される。鉄釘が数点出土していることから、組合式木棺が使用されたことが判明する。これらの埋葬時期は、103の須恵器高杯などから6世紀後半と考えられる。

30号墳における最後の埋葬は、閉塞石の北側より出土した114・115の須恵器蓋・杯などから7世紀初頭であり、組合式木棺の使用を示すように周辺からは鉄釘が出土している。

30号墳石室内からは11点の耳環が出土し、6回の埋葬が行われたものと推測されるので、前記3例の他にもう3回の埋葬が行われたことになる。敷石の工程からは、奥壁より南へ2.6～5.8mまでの玄室南部から羨道北部の範囲、その南の羨道北部から中央部の範囲で各1回埋葬されたことが判明するが、あと1例の埋葬位置が明らかでない。玄室南部でも棺が東西に2個安置されたか、あるいはいずれかの埋葬段階で既に安置されていた棺を移動させ新たに置き直しとものと思われる。

出土遺物

84～87は蓋、88～90は杯、98～104は短脚の高杯である。91～95の蓋は灰白色の色調をなし、同じ色調の98～102の高杯に対応する。101の高杯は羨道で検出されたが本来は玄室に副葬されたものであろう。96・97の蓋は、敷石と西側側壁の南端の1段目の石が外側に湾曲してできた隙間から、立てられた状態で出土した。104の高杯には脚部に円孔がふたつ認められる。

105～110は蓋、111～113は杯、114は宝珠つまみをもつ蓋、115は杯、116・117は短脚の高杯、118～122は長脚の高杯、123は長頸壺である。119～121の高

杯には2段で3方に、118、122には2段で2方に透かしが認められる。123の長頸壷は閉塞石の上に置かれた状態で出土した。形骸化した波状文が施される。

玄室からは釘・鋏・鉄鏃・鉄刀・鉸具・耳環などの金属製品が出土した。釘は一辺5 mm前後のものが多い。141の釘は打ち込まれた時に、垂直方向に約90度、さらに水平方向に90度曲げられている。145は刃部が断面三角形をなし、鏃かと思われる。149・150は片刃状の断面をなすため刀子と思われるが、149は下半を欠くため鉄鏃の可能性もある。151・152は鉄刀で、151は茎に目釘孔がひとつ認められる。156以下の鉄器は用途不明であるが、157は卵形のような形状に復元でき、石室内からは鉄刀も出土していることなどから、責金具などの用途が考えられる。玄室から耳環は5点出土しており、161・162・164は銅芯に金メッキ、163・165は銅芯に銀メッキが施される。

羨道からは鋏・釘・鉄鏃・鉄刀・鍔・杏葉・耳環などの金属製品が出土した。216

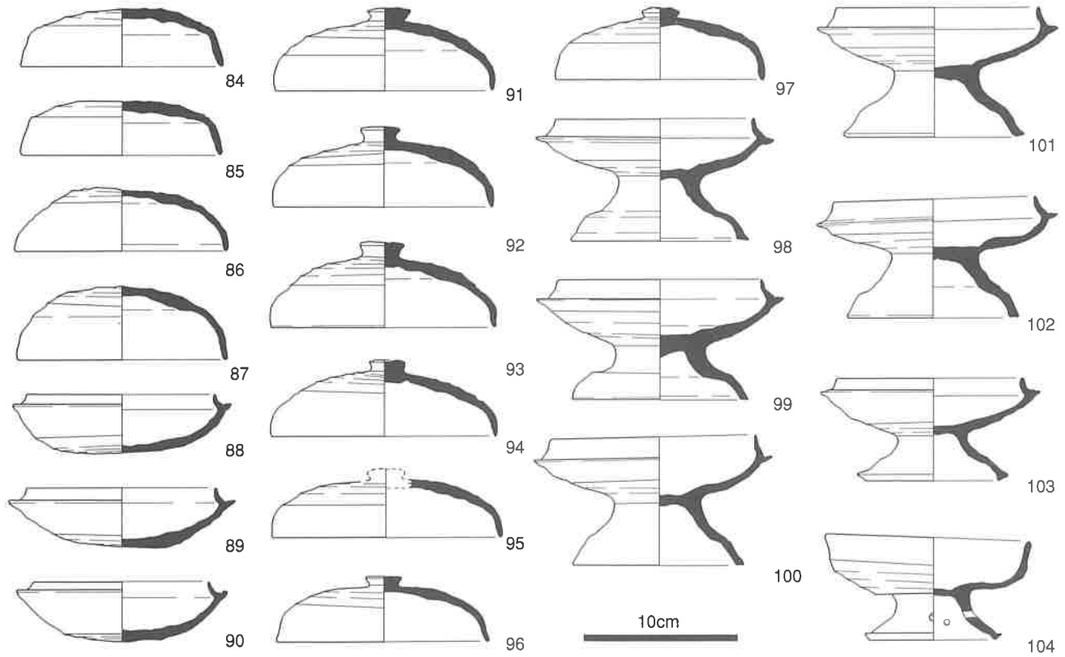


図84　30号墳玄室出土土器実測図

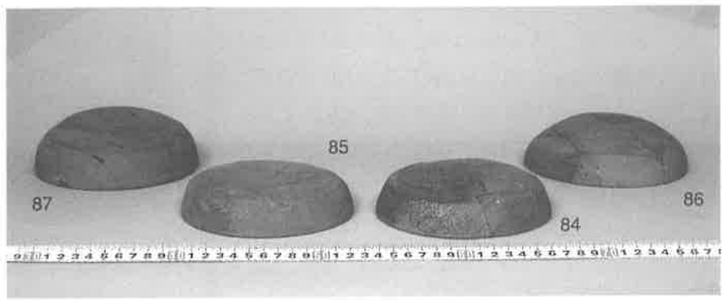


図85　30号墳玄室出土須恵器蓋

図86　30号墳玄室出土須恵器杯

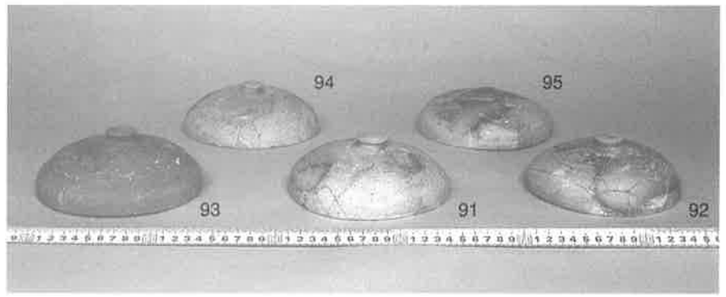


図87　30号墳玄室出土須恵器蓋

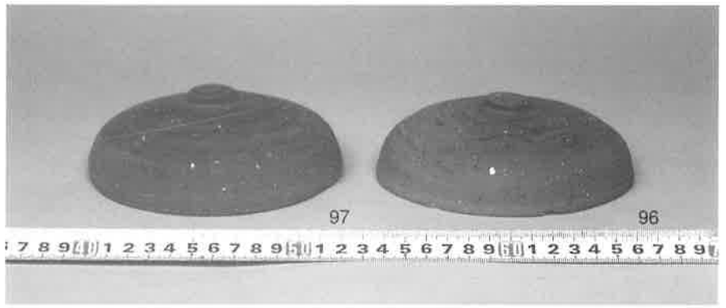


図88　30号墳玄室出土須恵器蓋

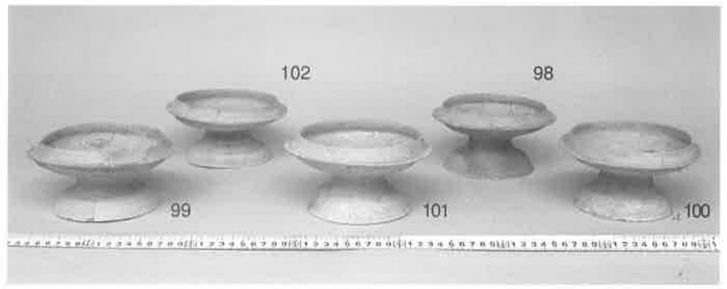


図89　30号墳玄室出土須恵器高杯

図90　30号墳玄室出土須恵器高杯

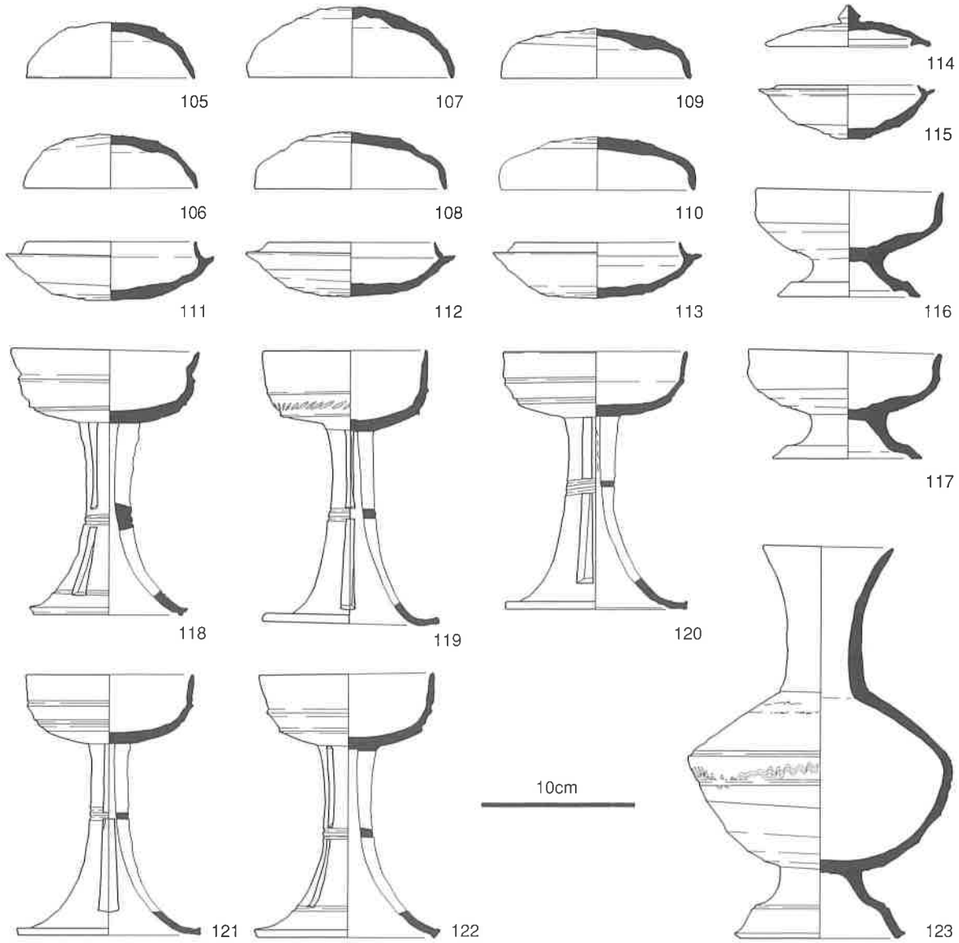


図91　30号墳羨道出土土器実測図

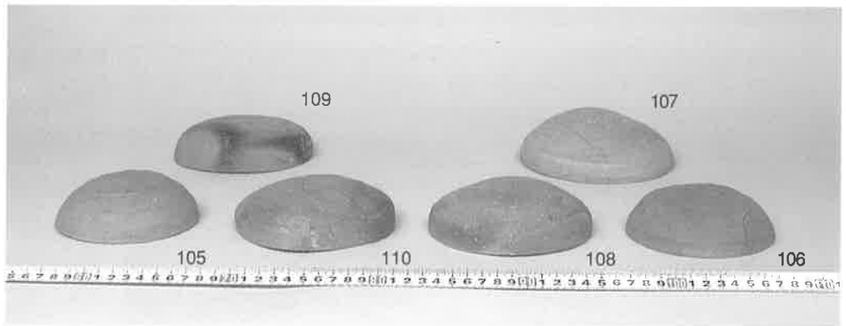


図92　30号墳羨道出土須恵器蓋

図93　30号墳羨道出土須恵器杯

図94　30号墳羨道出土須恵器高杯

図95　30号墳羨道出土須恵器高杯

図96　30号墳羨道出土須恵器蓋

図97　30号墳閉塞部出土長頸壺

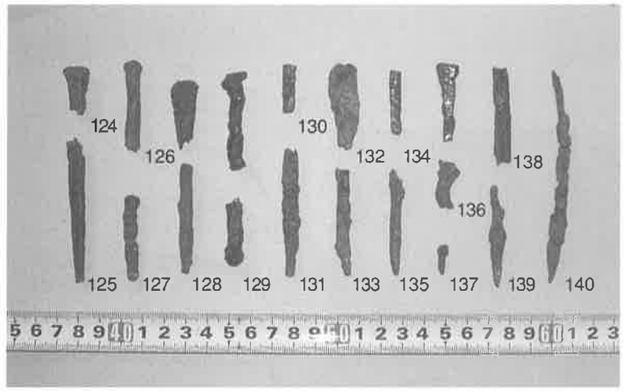


図98　30号墳玄室釘

図99　30号墳玄室出土釘

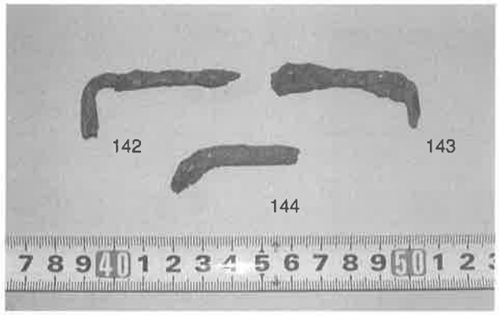


図100　30号墳玄室出土鋏

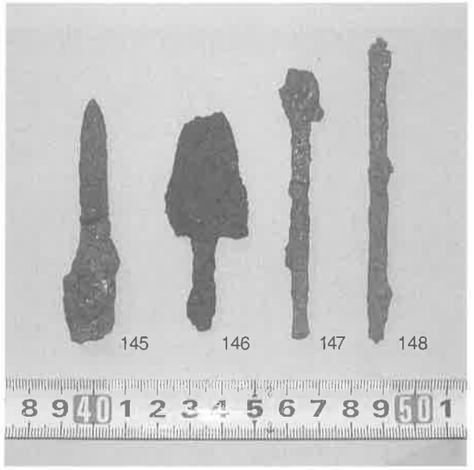


図101　30号墳玄室出土鉄鏃・鎹

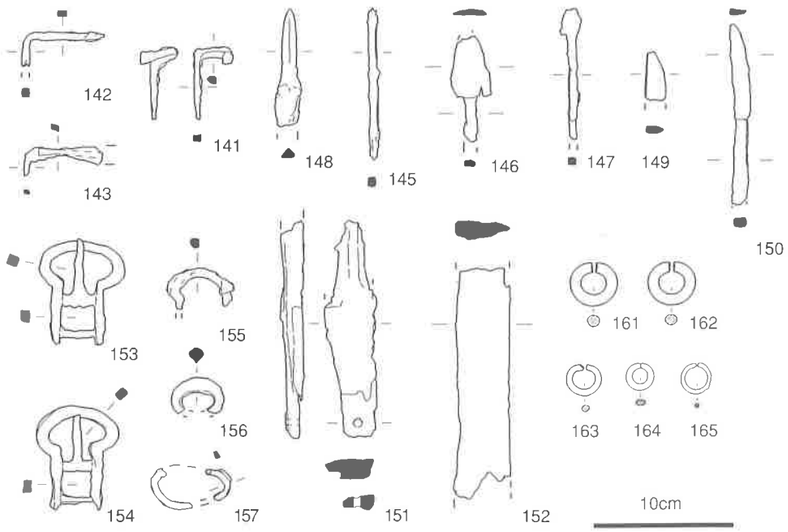


図102　30号墳玄室出土金属器実測図

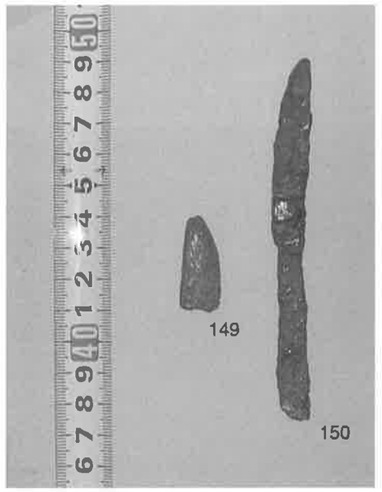


図103　30号墳玄室刀子?

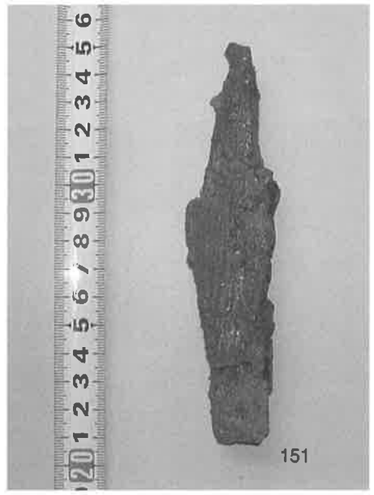


図104　30号墳玄室出土鉄刀

図105　30号墳出土鉄刀

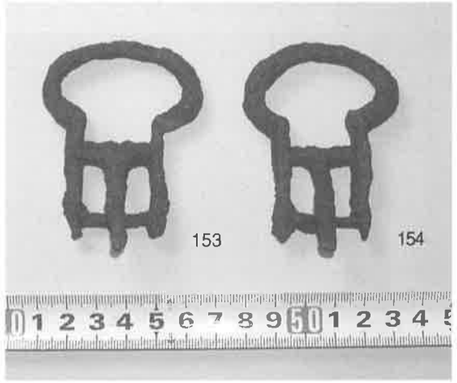


図106　30号墳出土鉸具

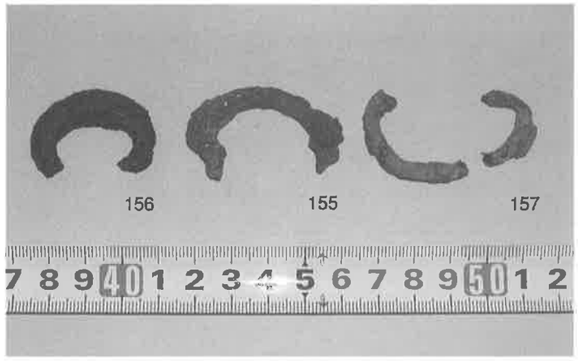
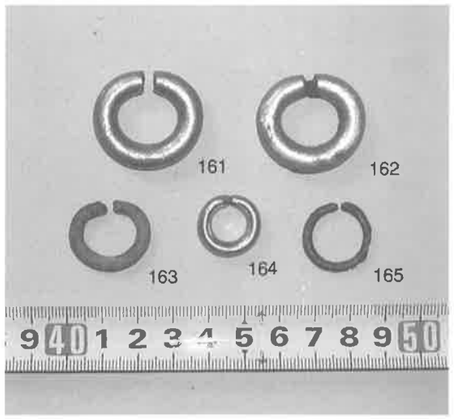


図107　30号墳玄室出土鉸具・不明鉄器

図108　30号墳玄室不明鉄器

図109　30号墳玄室出土不明3

図110　30号墳玄室出土耳環



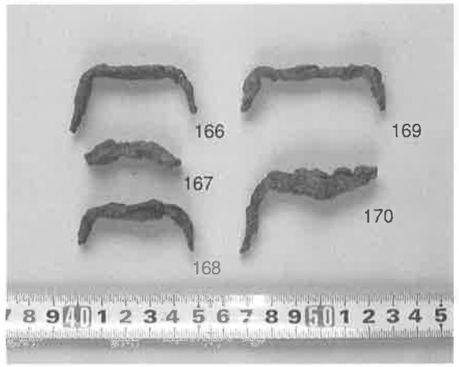


図111　30号墳羨道出土鋏

図112　30号墳羨道出土釘

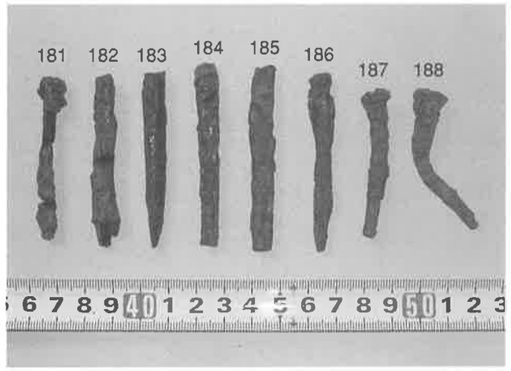


図113　30号墳羨道出土釘

図114　30号墳羨道出土釘

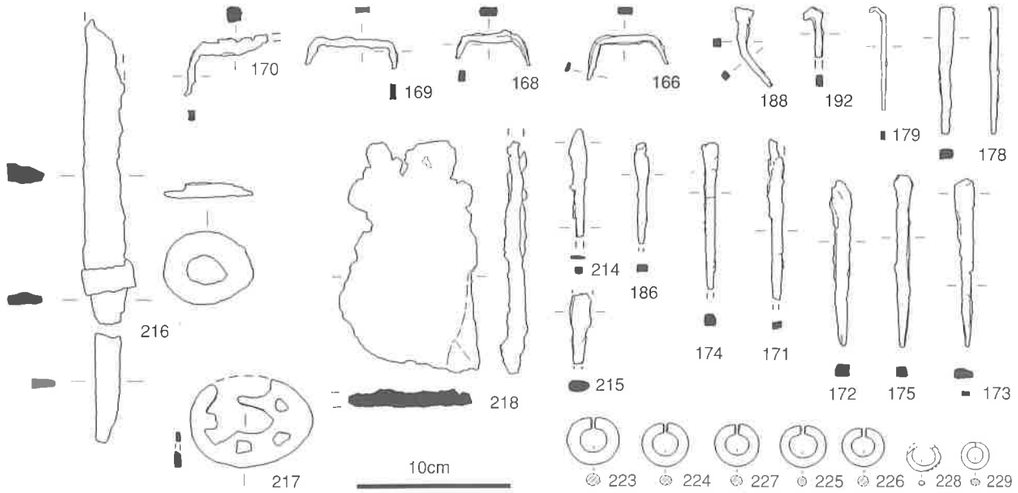


図115　30号墳羨道・墓壙出土金属器実測図

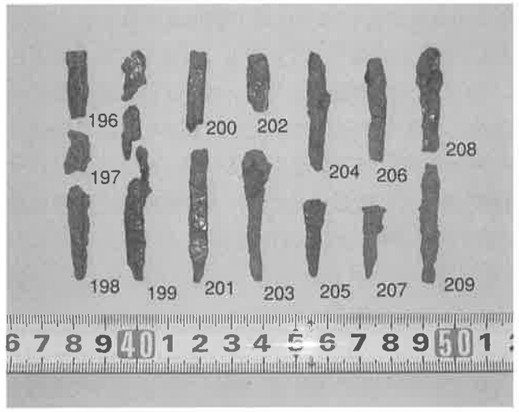


図116　30号墳羨道出土釘

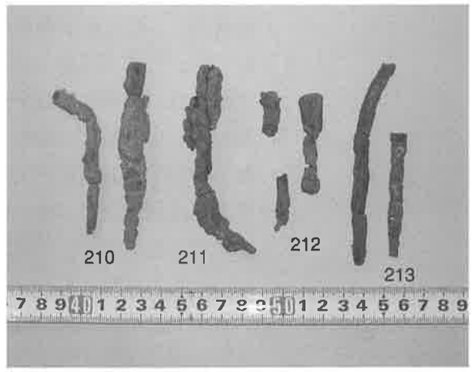


図117　30号墳羨道出土釘

図118　30号墳羨道出土鉄鏃

図119　30号墳羨道出土鉄刀

図120　30号墳羨道出土鍔

図121　30号墳羨道出土杏葉

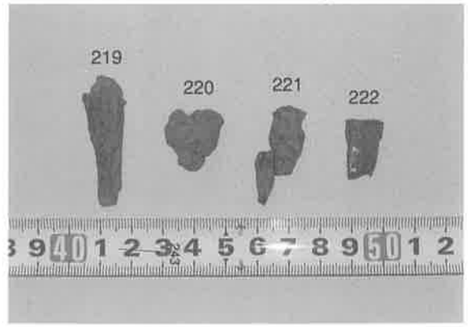


図122　30号墳羨道出土不明鉄器

は鉄刀で、鍔は切羽から外されて刃の上に置かれた状態で検出された。また長さ約2.5cmの鉏片もともに出土した。218の杏葉は劣化が著しく装飾を確認することはできない。耳環は223～228の6点が羨道内から出土し、229は調査地南端の墓壙内から出土した。227・229は銅芯に金メッキ、223・224・226は銅芯に銀メッキ、225・228はメッキが剥離しており銅芯のみが遺存する。

また玄室からは230～236の滑石製臼玉、羨道からは237～241の濃い青色をなすガラス製小玉、242の水晶製切り子玉が出土した。

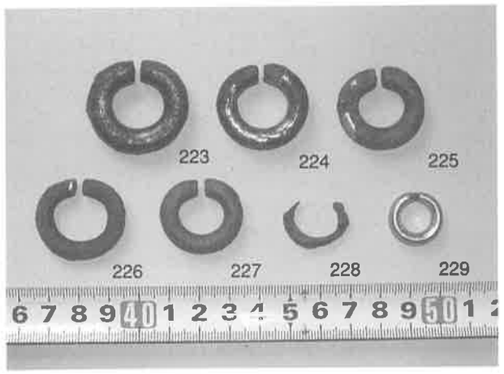


図123　30号墳羨道・墓壙出土耳環

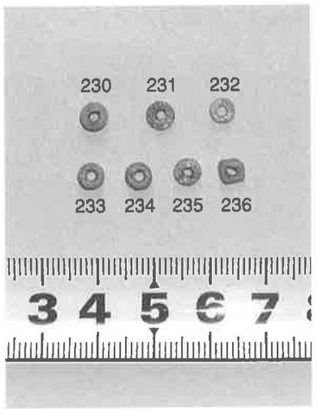


図124　30号墳玄室出土玉

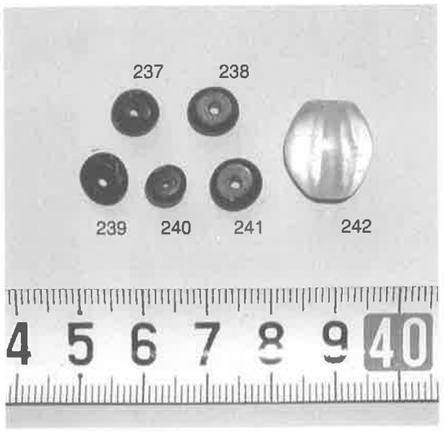


図125　30号墳羨道出土玉

3.　31号墳の調査結果

遺構

現地の標高は64.8m前後の平坦面をなし、上部には近年の盛土が調査地東側で15cm、西側で80cm堆積していた。調査地の南西部では盛土の下面で、セメントが貼られた旧地表面が認められ、その下部は約1mの深さまで掘削されており、31号墳の石室に使用されていたと思われる石が廃棄されていた。第3層は古墳築造以前の堆積層で、調査地北東部の試掘坑付近は棚田造成のために、第3層が約30cm切土され、室町時代前半の遺物を含む整地層と、その下面で杭跡および、幅220cm、深さ40cmの土壙が認められた。

31号墳は棚田造成による削平が著しく、墳丘等は遺存しておらず、石室の西半も破壊されていた。埋葬施設は横穴式石室であり、袖の有無については明らかでない。奥壁には幅40cmの平坦面をもつ高さ72cmの石が1つ、その西方には長径52cm・短径18cm、深さ9cmの抜き取り穴、両者の間には幅10cm以下の詰石が数個遺存していた。東側側壁には幅70cm以下の平坦面をもつ高さ56cm以下の石3個、長径50cm以下・深さ14cm以下の抜き取り穴4個、長径20cm以下の詰石が遺存していた。これらの石と抜き取り穴の検出状況から、石室の全長は5.6m以上の規模でであったといえる。石室に使用されていた石は全て斑糲岩である。また最も北の抜き取り穴の石室背面にあたる東側では、1段目の石を安定させるために長径20cm以下の裏込石が数個集積した状態で検出された。また墓壙は東側側壁の外60cm以下、奥壁の外28cm以下で認められた。

西側側壁の石は後世の棚田造成などによって破壊され、その石材は石室の西方約1mに掘削された深さ約1mの撹乱に廃棄されていた。こうした石材廃棄の方法は、東大阪市内ではみかん山古墳群第1次調査検出の5号墳でも確認されている（中西2001）。また地山上面では青灰色した長径48cm以下の

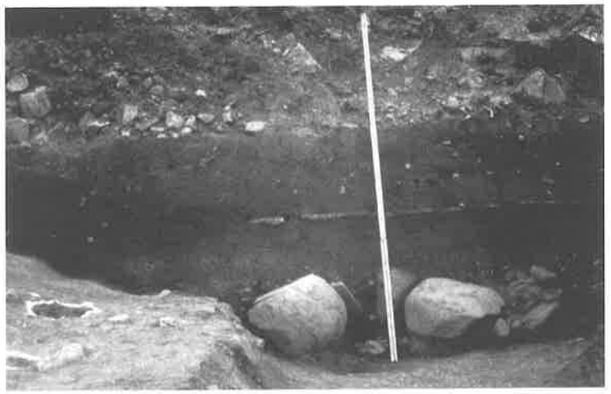
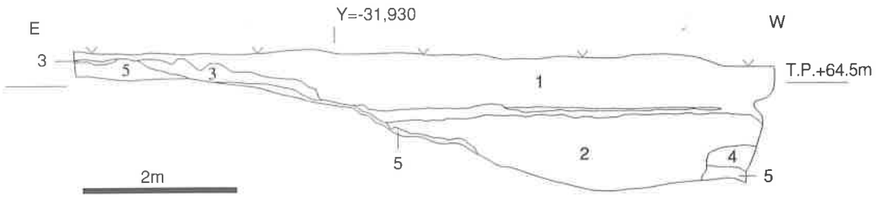


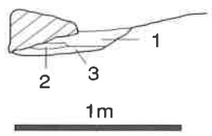
図126　B地区南壁断面



1. 盛土
2. 10YR4/2 灰黄褐色　細粒砂～5mm以下の礫まじりシルト、31号墳の廃棄石含む
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色　中粒砂～5mm以下の礫まじり砂質シルト、15cm以下の礫微量含む
4. 花崗岩風化層
5. 10YR1.7/1 黒色　中粒砂～5mm以下の礫まじり粘土、50cm以下の礫微量、20cm以下の礫多量含む

図127　B地区南壁断面図

1. 10YR1.7/1 黒色中粒砂～細礫混じりシルト
2. 7.5YR3/2 黒褐色中粒砂～細礫混じりシルト
3. 5YR3/2 黒褐色中粒砂～細礫混じりシルト



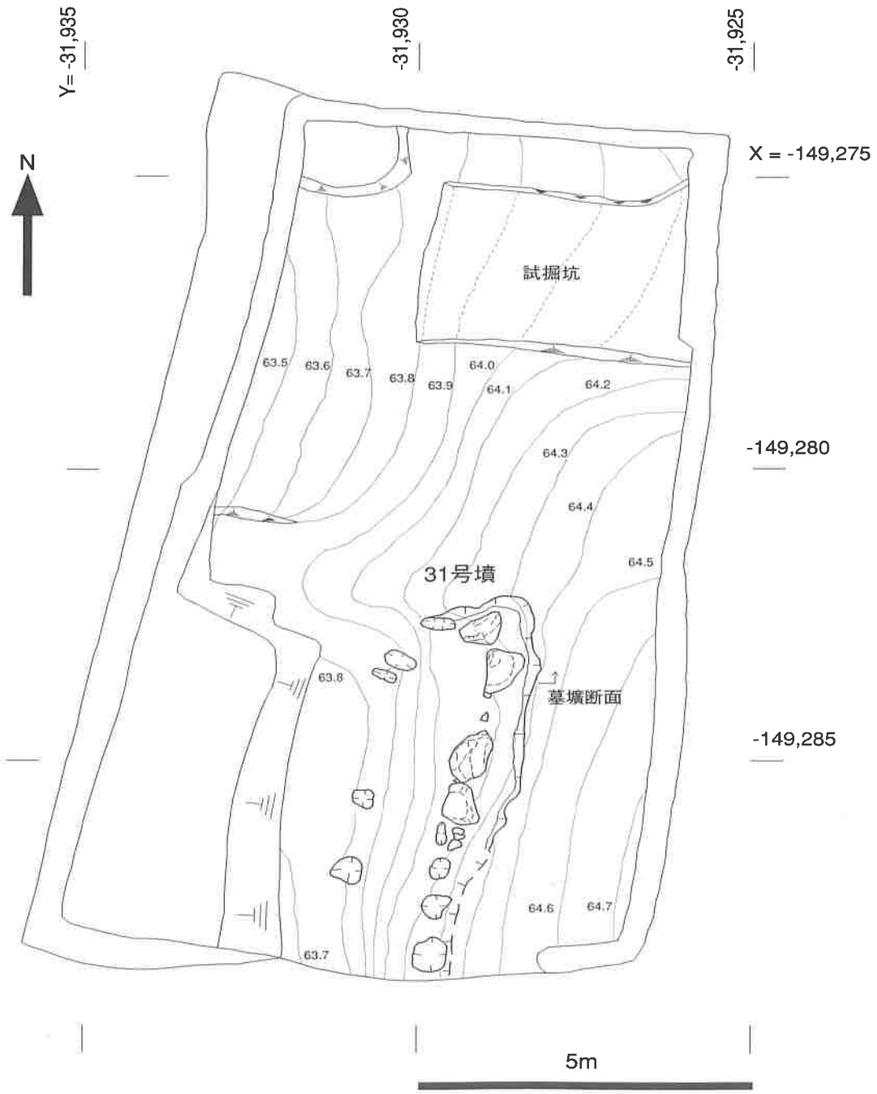


図 128　B 地区遺構平面図・墓壙断面図

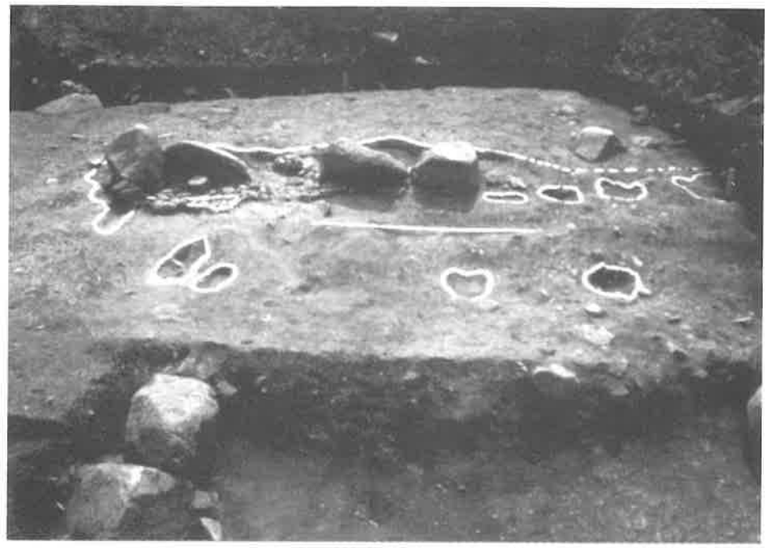


図 129　31 号墳全景
西から

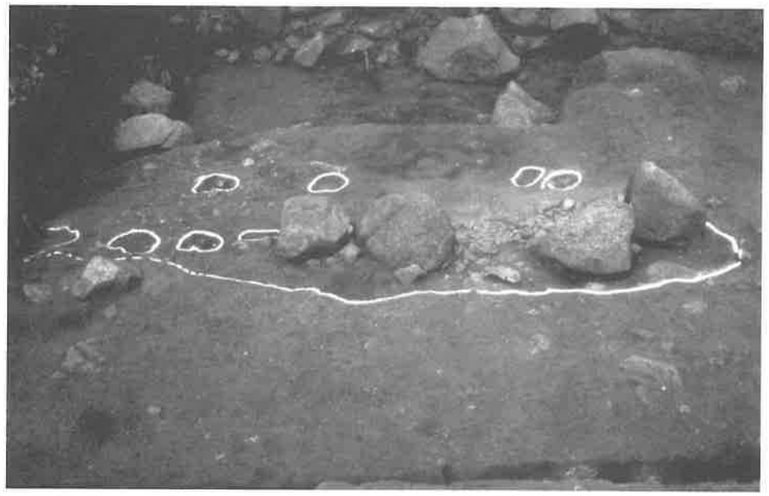


図 130　31 号墳全景
東から

図 131　31 号墳全景
南から

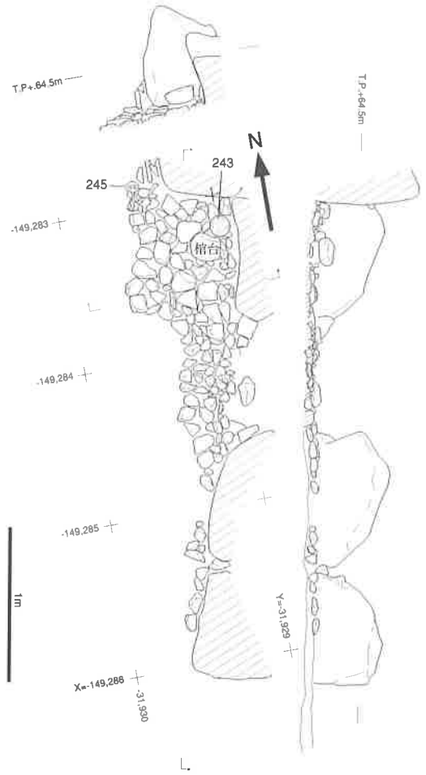


図 132　31 号墳平面図・立面図

図 133　31 号墳墓壙断面

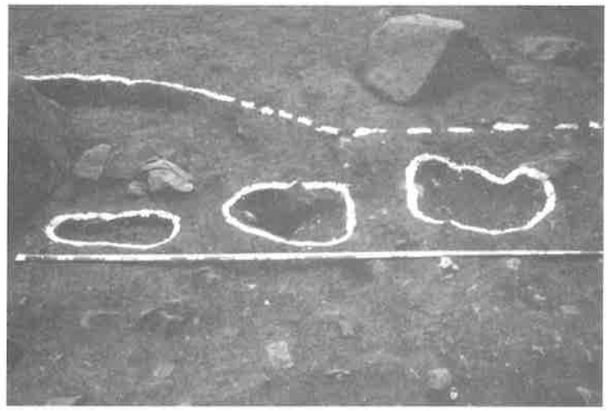


図 134　31 号墳抜き取り穴

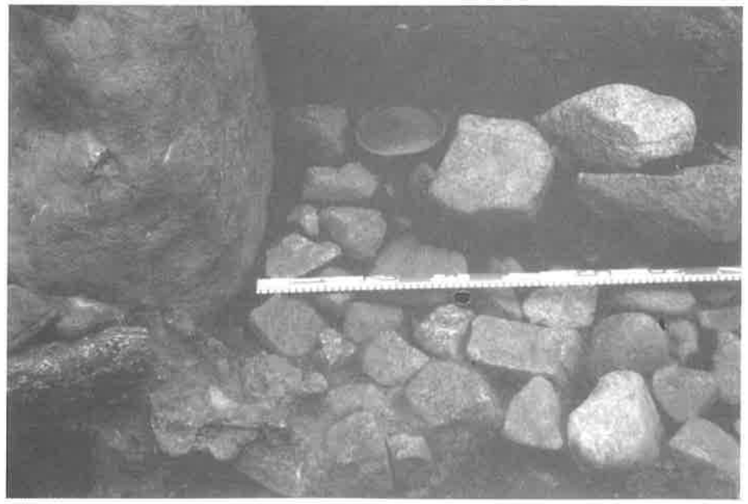


図 135　31 号墳遺物出土状況

楕円形・不定形をなす部分が認められた。奥壁の抜き取り穴と石を合わせた石室の幅とほぼ同じ 1.1m の距離が東側側壁との間に認められた。

奥壁から南約 2.9m までの石室床面には 4 ～ 36cm の自然石が平坦面を上にして敷きつめられていた。敷石上面の標高は 64.2m 前後である。長径 15cm 以上の比較的大きな敷石は奥壁から約 1m までの範囲に多く認められ、次いで32cm 程の間はやや小さめの石が敷かれ、その南側で再び大きめの敷石が用いられている。長径 20cm、高さ 5cm の棺台と思われる上面が平坦な石が奥壁東隅より南に24cm、西に 11cm の地点に遺存していた。石室およびその周辺から石棺が出土していないため、木棺が使用されたものと思われる。副葬品は棺外に置かれており、それらの年代から31号墳は 6 世紀後半頃に築造されたものと考えられる。

図 136　31 号墳出土須恵器杯・蓋

遺物

244 の須恵器杯は、石室内の奥壁東隅と前述した棺台と思われる石との間から正置した状態で出土した。底部外面には十字状のヘラ記号がある。出土位置は明らかでないが、石室内から出土した 243 の須恵器蓋も副葬品と思われる。これらは 6 世紀後半のものと思われる。245 の轡は奥壁前から出土した。

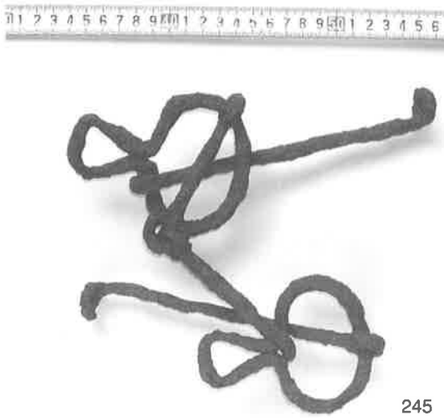


図 137　31 号墳出土轡

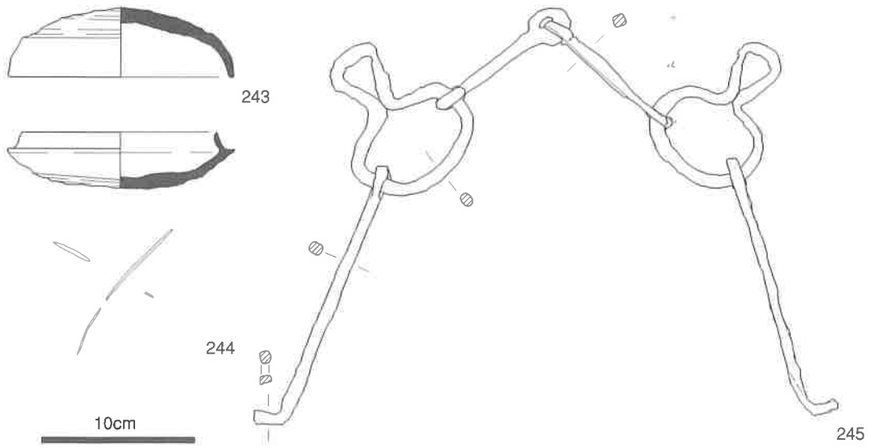


図 138　31 号墳出土遺物実測図

第4章　おわりに

花草山古墳群に開発がおよんで古墳が破壊され始めたのは、29号墳の調査結果から、13世紀末～14世紀前半と推測される。その原因は、棚田を主体とする耕作地の造成による。

また本古墳群を山畑古墳群の小支群と理解しようとする説がある。両古墳群には組合式石棺や馬具の出土などの共通性が認められる（秋山・池谷2000）。今回の調査でもそうした遺物を確認することができた。今後、周辺古墳群との関連の解明が課題となろう。

参考文献

秋山浩三・池谷梓　2000「五里山古墳群・花草山古墳群と採集資料の検討―生駒山西麓部における群集墳の形成過程をめぐって―」『大阪文化財研究』第19号　財団法人大阪府文化財調査研究センター

荻田昭次　1977「古墳時代」『河内四條史』第一冊本編　四條史編纂委員会

荻田昭次　1981「古墳時代」『河内四條史』第二冊資料編　四條史編纂委員会

中西克宏　2001『みかん山古墳群第1次発掘調査報告書』　東大阪市文化財協会

吉村博恵　1988「花草山23・24号墳発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査　昭和62年度』東大阪市教育委員会

報告書抄録

たくちぞうせいにともなうはなくさやまこふんぐんだいにじはっくつちょうさほうこくしょ

書名　宅地造成に伴う花草山古墳群第2次発掘調査報告書―29・30・31号墳―

副書名

編著者名　井上伸一

発行機関　財団法人 東大阪市文化財協会

所在地〒577-0843　東大阪市荒川3丁目28-21　電話番号　06-6736-0346

法人ID　42170　発行年月日　2003年3月31日

はなくさやまこふんぐん

所収遺跡名　花草山古墳群

ひがしおおさかしかみしじょうちょう

所在地東大阪市上四条町1228-8,1244-1～11,1260-1・6・7の一部,1263-3の一部,1266-2・3の一部

市町村コード27227

調査位置　北緯　34°39′24″1　東経　135°38′58″2

調査期間　1997年1月27日～6月16日　調査面積　766m²

調査原因　宅地造成　種別　横穴式石室

おもな遺物　土師器　須恵器　馬具　武具　耳環　釘　鎹　玉

宅地造成に伴う花草山古墳群第2次発掘調査報告書

―29・30・31号墳―

2003年3月

発行　財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3-28-21　TEL.06-6736-0346

印刷　株式会社ダイニチ

〒553-0003 大阪市福島区福島5-15-13 TEL.06-6451-4133

宅地造成に伴う花草山古墳群第2次発掘調査報告書―29・30・31号墳―

二〇〇三

財団法人　東大阪市文化財協会